
Sunny Day Bloom 2

高橋はさみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sunny Day Bloom2

【Nコード】

N2123B

【作者名】

高橋はさみ

【あらすじ】

天使のサニー、魔族のナーレス、人間の女の子でメイドのスリイ、あと時々登場する人間の少年ブルームの4人の冒険ファンタジーの第2弾。期間限定(?) キャラクター、言葉をしゃべるウサギのステアも加わってさらににぎやかに。今回はアンドロイドのお話です。

0・笑

僕は人間の身体を乗っ取っている天使のサニー。

この世界で生きている人々は、身体と意識体という魂のような存在からなっている。

この二つのどちらかを失うと、「死」になる。

天使や魔族もこれと同様である。

僕はある事件のために自分の身体を失い、今こうしてブルームという少年の身体を乗っ取っているためにどうにか「死」を免れているのである。

さて、そんな僕は魔族のお兄さんナーレスとメイドさんのスリイ、そしてユードラという村（訪れた当時は国だったけどね）で出会った言葉をしゃべるウサギ、エストリア（通称ステア）と旅をしている。

今の旅の目的はステアを庭師として雇ってくれるナーレスの知り合いのところに行く、というものである。

目的地までかなりの距離があるらしく、いくつかの国や町を通っていくのだけど、世間一般的に見てやっぱり言葉をしゃべるウサギは珍しく、見世物小屋に目を付けられそうなので、ステアは人に出会うたびにスリイの抱えるぬいぐるみを演じなければならない。

じつと演技を続けるステアも大変だけれども、ウサギといえどずっしりと重量のあるステアを抱えるスリイも相当大変である。

「ステアお肉付きすぎよ。食うわよ。」

「ちよつと、冗談に聞こえないんですけど…。」

「このわきの下とか、柔らかいのよね。」

そう言いながら、ステアのわきにある指をこちょこちょと動かしてみ。

「ぬやはははは！やめてください、くすぐりたいです。」

「ここがおいしいの・よ・ね。」

「ぬは〜！やめてください。」

「ステアって笑い方変だよね。」

そんなスリイとステアを見て、ナーレスが冷静なコメントを発した。
確かに……。

そんなわけで今日も僕たち3人と1匹の旅路は続くのです。

「ぬやはは！！スリイさん、もう許してください〜！！」

「う〜さぎ〜う〜さぎ〜もお〜こもこ〜う〜さぎ〜」

「スリイ、疲れて壊れたかな？」

果たして、次の国が町までステアは笑い死にせずに着くのだろうか？

1・人工生命体（アンドロイド）

僕たちは夜になってから、ようやくちゃんとした町に到着することが出来た。

お疲れ気味のスリイとステアを宿に残し、僕とナーレスはせっつかくなので、町をぶらぶらと散策することにした。

夜だというのに、街はキラキラした外灯がたくさんあり、人々もたくさん行きかっていた。

まるでクリスマスの夜のような、そんな町だった。

「随分きれいなところだね。スリイたちも来ればよかったのに。」

「ん？でもこの町、最近何かと物騒みたいだよ。」

どこで買ったのか？いつの間にか新聞を手に使っていたナーレスが僕に、記事の一部をちらりと見せてくれた。

「何々？『セクシー女優ファリス・リーは男だった？！多額の借金の正体は膨大な整形費だった。』」

「あ、それじゃない。」

ナーレスは新聞の別の記事を指差す。

「これはこれで衝撃だね。」

「笑えるけどな。」

僕は改めて新聞を覗き込んだ。

『連続通り魔殺人事件 アンドロイドによる犯行と断定』

新聞記事の4分の1を飾っている結構大きな記事だ。

「アンドロイド？」

「サニーは見たことないかな？アンドロイド人工生命体、ロボットのことで。」

「へえ、ロボットが人を殺すの？」

「ロボットって、言うけど見た目は人間とぜんぜ…」

「？ナーレス？」

僕がナーレスの方を見たときは、彼は新聞をその場に捨て、手に剣を召喚していた。

そして、彼の近くを歩いていた男性に向かっていく。

「！」

男性はびっくりしたように、その場にころんでしまった。

そして、その彼の上ではナーレスの剣と、ナーレスの以外の人の持つ短刀が金属音を響かせていた。

「きゃあー！」

周りにいた人々も驚いて、急いで彼らの周りから離れていく。

ナーレスと剣を交わした相手は東洋の服を着ていて、顔を隠すようにフードを深くかぶっていた。僕からはその表情は見えない。

ナーレスとそいつはしばらくにらみ合っていたが、やがてナーレスから離れると驚くほどの速さで闇に消えていった。

「大丈夫ですか？」

僕はころんでしまった男性を助け起こした。

ナーレスも剣をしまう。

「大丈夫だ。それよりも、どうもありがとう。あの状況で相手に気づくなんて、君はなかなか腕が立つようだね。」

「たまたまですよ。あれが例の通り魔ですか？」

「そのようだね。まったく恐ろしい。」

男性はオスカーといい、この町でホテルを経営している結構な富豪だった。

その場でお互いの自己紹介をしている間に警察が現れ、あれこれと事情聴取をされ、すっかり夜も更けてしまっていた。

オスカーは僕たちに申し訳なさそうだった。

「君たちに助けてもらった上に、こんな時間まで巻き込んでしまった申し訳なかったね。」

よかったら僕のホテルに泊まらないかい？もちろん、宿代はいらないよ。」

オスカーがそんな嬉しいことを言ってくれたので、僕とナーレスはちやっかり甘えることにした。

「スリイとステアも呼ぼうか？」

僕の言葉にナーレスは頷かず、何かしばらく考えると、

「いや、彼女達はちよつと別行動をしてみよう。」

と、言つたのだつた。

スリイを差し置いて僕たちだけ良いホテルに泊まつたことがバレるとスリイがすごい勢いで拗ねることは目に見えている。

それを差し引いてでも、彼女を別行動させるのは、たぶんナーレスに何か思惑があるはずである。

このオスカーという男性と、さっきの通り魔。

そして、記事にあつた人工生命体^{アンドロイド}。

今回もなんだかややこしい事件に巻き込まれたことをナーレスは気づいたのだろうか？

または、ただナーレスが優越感に浸りたいだけだったりして…。

それなら、僕は早めにスリイにチクつて被害を最小限に抑えなければ！！

「サニーって天使のくせに結構ひどいよね。」

♪

2・探し物

アンドロイド

ナーレスが町中で人工生命体に襲われていたオスカーという男を助け、お礼として彼の経営するホテルに泊めてもらえることになった。そのホテルはいかにも高級感漂うセレブご用達な雰囲気だった。

僕は少し場違いな感じがして、何だか気恥ずかしかった。

オスカーは僕たちを部屋に案内すると、「仕事に戻らなくては。。。」と言い残して、すぐにいなくなってしまった。

初めて泊まる高級な部屋を前に、僕は緊張していた。対照的にナーレスは広いベッドにゆったりと座りリラックスしているようだった。まるで泊まりなれている芸能人のようである。

「で、これからどうするの？」

「男二人でいちやいちやするかい？」

「そんな一部のコアな女性を喜ばせないでいいから！」

「（笑）うそうそ。まあ、今日はせっかくなんだからここでゆっくりさせてもらおうよ。たぶんこれからちよつとやっかいなことに巻き込まれそうな気がするし、今日ぐらいは休んでもバチは当たらないよ。」

ナーレスがニヤニヤと何かを企んでいるような笑みを向けた。

「ナーレスは何で、そんなに厄介ごとが好きなの？」

「魔族とメイドと天使とウサギと一緒に旅をしているんだから、当然だよ。」

「意味がわからない…もういいです。」

ナーレスと一緒にいると、彼が魔族であることをいついっい忘れていることが多い。

でも逆にこういう意味のわからない発言や行動を起こしたとき、つくづく彼は魔族なんだな、と再認識してしまうのだ。

彼の旅の目的はなんだろう？

何となく一緒に旅を続けているけれど、その目的は彼の口から聞い

たことがない。

前に一度、まだ僕が彼が魔族だからと警戒していた頃、スリイに聞いたことがあるけど、そのとき彼女は、彼は探しものをしている、と言っていた。

一体何を探しているのだろうか？

「…ナールスは何を探しているの？」

ふと僕の口からその疑問が声になって出てきた。

ナールスが笑うのを止めて僕をじっと見つめた。

僕は何だかまずいことを聞いてしまった気がして、彼から視線をはずしてしまった。

「ごめん、何でもないよ。気にしな」

「じゃあ、サニーは何で俺と旅をするの？」

「え？」

僕はもう一度ナールスを見る。

彼は笑っていない。

怖いほど鋭いまなざしで僕を見ている。

「ぼ、僕は…」

ブルームニ、自由ヲ。

ナールスナラ方法ヲ知ッテイルヨネ？

「自分が犠牲になったらいいなんて考えはやめようぜ。他の方法があるはずだ。」

ナールスはいつもの穏やかな顔で僕の頭を叩いた。

その表情はほんの少し、寂しそうに見えた気がした。

「俺はまあ、魔族だし自分から厄介ごとに首を突っ込みたくなる性格なんだ。」

旅の目的はスリイも言ってたと思うけど、探し物。その探し物に関してはまだ何も話せない。そのときが来たら話すよ。それまでは仲良く一緒に厄介ごとを楽しもうぜ。」

「うん……。」

そのときが来たら僕たちの旅は終わるの？

「なぐんか、雲の多い夜だな。明日は雨かもしれないな。」
空と同じように僕の心も晴れなかった。

3・爆破

夜も明けようかという頃、ブルームは目を覚ましてベッドから起き上がった。

サニーが眠っている間、ブルームはこうして自由に行動することができる。

もちろん、サニーが目を覚ますと問答無用で、その時間は終わるがサニーは気を使ってなかなか意識を戻さないこともあった。

サニーは常にブルームに気を使っている。

表向きにはそう見えなくても、身体の持ち主のブルームにはそれば理解できた。

「気を使ってくれるのは嬉しいけど、たまにはお昼寝でもしてくれないかな？この時間退屈なんだよ…はあ。」

ブルームはため息をつきながらカーテンをめくり、窓の外を見た。空はまだ薄暗かったが、ホテルの中庭の様子を見ることが出来た。そして、ブルームは中庭に人影を発見した。

特徴的な東洋の服装と深々とかぶったフードには見覚えがある。

「あれは……！」

「オスカーを襲った奴だな。」

「ナーレス。」

いつの間にかナーレスも起きていてブルームとともに窓から中庭に鋭い視線を向けていた。

中庭にある木の陰に、町でナーレスと一戦交えた人工生命体が立っていた。

彼はゆっくりとホテル全体を見渡しているように見えた。

ふと、彼はナーレスたちの方を見て、視線を止めた。

「俺たちに気づいた？」

「みたいだな。」

人工生命体はナーレスたちの方に腕を突き出した。

その手には何かが握られている。

「何だ？」

「やばい！」

ブルームが人工生命体の持っているソレをよく見ようとすると、ナーレスが勢いよく窓を開ける。

そして、ブルームの腕をつかみ外に飛び出したのと、ホテルに爆発音が響いたのは同時だった。

ナーレスは翼を開くことなくブルームをかばうようにして堅い地面に落ちた。

地面にナーレスの血が広がっている。

「おい！大丈夫かよ？！」

「大丈夫大丈夫。魔族と天使は人間と違って丈夫だからね。それよりここから早く離れよう崩れてくる。」

ナーレスはよろよろと立ち上がって歩き始める。

その足取りはいつもより全然おぼつかなかった。

安全な距離まで来たところでナーレスは膝を付いた。

「ほ、本当に大丈夫なのか？」

「すぐには回復しないから。ちよつと痛いかな。」

ブルームに向けた苦笑いがいつもより弱弱しかった。

「痛いどころじゃないだろう。ちよつと待って。」

ブルームは立ち止まるとゆっくりと目を閉じた。

次に目を開いたときは瞳の色は金色になり、髪の毛先が縦ロールになっている。

サニーだった。

ナーレスの姿を見て、僕は目を見張ったがすぐにはっとしてナーレスに治癒の魔法を施した。

「何で飛ばなかったの？」

「ホテルにはたくさん人がいるだろ？見られたらまずい。」

「だからって何もここまでしなくても……。」

「サニーだったらこうすると思って、マネをしたんだよ。」

「……。」

ナーレスの言葉に僕は何も返せなかった。

確かにそうしただろうと思ったからだ。

「心配する仲間の気持ちがわかったかい？」

「わかったよ。だからナーレスももうしないでくれ。」

「はい。」

出血も止まり、ナーレスはいつもの余裕のある表情に戻っていた。

ホテルは見るも無残な姿になっていた。

ホテルの正面には救急車や消防車が何台も止まり、辺りは騒然としていた。

「そういえば、あの人工生命体はどこに？」

「まだ近くにいますはずだ。」

僕たちはホテルの裏道を行き、さっきの人工生命体を探した。いつの間にか夜は明け、火の手が手伝って異様に明るかった。

ホテルを爆破した犯人は、すぐに見つかった。

裏道を抜けた先に静かにたたずんでいた。

「おい、お前は何でこんなことをする？」

ナーレスの問に彼は無表情で答えた。

「あの男を殺さなくてはならない。」

「そのためには他の人を巻き込んでいいのか？」

「手段は選ばない。邪魔な者は消えてもらう。それだけだ。」

人工生命体がかすかに笑みを浮かべた。

その無感情なはずのその笑みは恐ろしいぐらいの殺気を帯びていて、僕の中でブルームが「逃げろ」と叫んでいた。

人工生命体は自爆した。

4・ミシェル

早朝、ホテルとその近くの空き地で爆発が発生した。

そのことで町は騒然となっていて、その事件はスリイの耳にも何度も入っていた。

サニーとナーレスが帰ってこない、ということは恐らく二人はこの事件に何らかの形で首をつっこんでいるとスリイは思っていた。

過去の経験上、大きい事件には何かと首を突っ込みたがるのがナーレスである。

ステアに留守番を頼み、スリイは爆発事故の起きた現場に足を運んだ。

ホテル周辺には人ばかりでできていて、中の様子をうかがうのは難しかった。

スリイは人だかりの中にサニーとナーレスがいないかどうか探したが、ついに見つけることはできなかった。

「まったく、自分勝手な二人だね。」

スリイはため息をつきながら、今度は空き地の方に向かった。

こちらはホテルとは対照的に野次馬はいなかった。

「KEEP OUT」のテープは張られていたものの、周りには人も少なく、スリイは空き地に入り、様子をゆっくり見ることが出来た。

空き地には機械の残骸が落ちていた。

恐らく、人の身体の一部の形をしたものが落ちていてスリイは一瞬ぎよっとしたが、よくよく見るとそれも機械であることに気づいた。まるでロボットが自爆したよう、とスリイは思った。

「お嬢さん、それに触らないでください。一応、手がかりの一つとして回収しなければならぬからね。」

ふとスリイの背後から声が聞こえた。

振り返ると白衣を着た男性が、手の形をした機械の破片をひらひら

と振りながら立っていた。

「医者？」

「残念。科学者です。」

科学者だという男性は持っていたビニール袋にその手を入れ、スリイの近くに落ちていた指を拾った。

「なかなかよくできてますよね、最近の人工生命体は。思わずぞっ
としますよ。」

「やっぱり人工生命体なのね？最近の通り魔事件と同じ奴？」

「わかりませんね。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。聞きたくても本人は爆発してしまっただけですしね。記憶データを検証しましたが破損が何もありませんでしたよ。」

科学者はがっかり、というようにため息をついた。

「聞きたいことがあるんだけど、事件については極秘なの？」

「いいえ全然。この騒ぎでそれどころじゃないんで、僕の知っていることであれば教えて差し上げましょう。僕もそろそろ破片集めに飽きてきたところなんで女性と話ができればこれ以上の暇つぶしはありません。」

「……変人？」

「よく言われますが、違います。科学者です。」

どう違うのよ、スリイは心の中で突っ込みつつ、あえて口には出さなかった。

彼から情報を聞き出せれば、ナーレスとサニーについて何か手がかりがあるかもしれない。

「あの爆発事故はやっぱりこの破片の人工生命体が犯人？」

「でしょうね。通信機器の付いたスイッチが発見されています。」

「……ここって、その真犯人が自爆したところなんですよ？何で、そんな重要な場所をあなた一人での対応なの？」

「まだ爆発物が残っているかもしれないから、怖いとかいう腰抜けばかりでしょ。とりあえず、変人扱いの僕で対応しているわけです。安全が確認されればこれも野次馬だらけになるでしょうね。」

「そんな危険なところに一般人がいて、注意しないの？」

「もうすでに安全は確認しているけど、警察がきたらうざいので、もうしばらく言わないつもりです。」

「……。」

科学者はもくもくは破片を拾い集めながら、天気の話でもするかのようにスリイに話した。

「そうそう、名前を言ってませんでしたね。僕はミシエル。一応、検察官もどきをやってる科学者です。」

「あたしはスリイ。見ての通りメイドさんです。」

「で？本当に聞きたいことはご主人の居場所ですか？」

「！」

スリイは驚いたようにミシエルを見た。

彼は特に表情を変えることなく、機械の破片を眺めながら言った。

「実はこの現場に来たとき少年が一人倒れていましたね、町の中の病院に搬送されて行きましたよ。ごく普通の少年でメイドさんのいるようなボンボンには見えませんでしたけどね。」

「一人……だけ？」

「僕たちがここに来たときは一人だけでしたよ。」

「そうなの……。」

少年、と聞けばとりあえずサニーだろうか？

でも、だとしたらナーレスはどこに行ったのだろうか？

いや、そもそも二人とも一緒にいるとは限らないんだから、サニー一人でも不思議ではない。

「その病院でどこにあるの？」

「あそこに見える縦長の建物がそうです。」

スリイはミシエルの指差す方向に振り向いた。

確かにそれらしい建物がある。

「とりあえず、行ってみるわ。どうもありがとうミシエル。破片拾い、がんばってね。」

「どういたしましてスリイ。しばらくの間は調査でここにいたりいなかったりだから、暇つぶしにでも来てください。」

ミシエルはにこやかに手を振り、走りさるスリイを見送った。

そして、自分の手に持っていた破片に視線を落とした。

「やれやれ、こんなに木っ端微塵になってしまつて、どうするつもりだいランスロットくん。」

ミシエルそう独り言をつぶやいて、破片拾いを再会した。

スリイはミシエルに教えてもらつた病院に着いた。

受付で話をする、すぐに運ばれた少年のいる部屋に案内された。

少年は……ブルームだった。

怪我の具合は大したことないようで、腕や頭に軽く包帯が巻かれていただけだった。

彼はベッドに座り、腕を組んで何かを考えてをしているようだった。

「何を考えてるの？」

「よお、スリイ。久しぶり。ナーレス知らない？」

「こつちが聞きたいわよ。」

スリイはブルームのベッドに座った。

「何があつたの？」

スリイの問にブルームはホテルで見たすべてを話した。

ナーレスが町でオスカーという男を通り魔の人工生命体から助けたこと。

オスカーのホテルにその人工生命体が来て、ホテルを爆破し、自らも自爆したこと。

爆発の後、気が付いたらすでに病院だったこと。

そして彼の中にいるはずのサニーがいないこと……。

「じゃあ、今のブルームは……」

「久しぶりのただの人間。」

「そつか。気分はどう？」

「何かすつきりしないな。もやもやしてる。」

「なぜ？」

「わからない。」

ブルームはふてくされたように再び考え事を始めた。

スリイは彼の考え事が終わるまで黙って待とうとしたが、あつと何かを思い出して口を開いた。

「そのオスカーって人はどうなったの？生きてるの？」

「そういえば……。」

ブルームは立ち上がる。

「ちよつと怪我大丈夫なの？」

「大丈夫。動けるならとつと退院しろって言われてるから行くぞ。」

「行くつてどこに？」

「オスカーの生死を確認する。」

ブルームは早歩きで病院の廊下を歩いていく。

スリイが慌ててあとに続いた。

病院の休憩室で乱暴に臨時の新聞を取ると、机の上に広げた。

ホテルの爆発事故の見出しが一面に広がっていた。

そして、その中に「ホテルのオーナー行方不明」の文字を見つけた。

「これじゃあわからないね。」

「だな。やっぱり、ナーレスたちを探そう。」

「うん。」

二人は病院を後にした。

5・失敗作

人には殺意がある。

他人からの言葉や行動で殺意を覚え、相手に対して「死ぬ」とか「殺してやる」といった物騒な感情が一時的に現れるものだ。

それが一時的でなく常に思うようになると、ついに人は行動に出る。しかし「殺人」が立派な犯罪であり、罪を犯すことになる。

そうになると、その後の人生は決して楽しいものではない。

ただの苦痛でしかない人生を歩みたくはないものである。

ならば、どうすればいいのか？

自分の手を汚さないようにすればいい。

だから、彼はその役目を人工生命体アンドロイドに負わせることにした。

溢れるほどの殺気とわずかな感情を持たされた生まれた人工生命体アンドロイドは、今日もまた誰かを狙う。

「犯人はオスカーを狙っているのは確かだけれど、でも何故彼は狙われなくてはならないのか？」

宿泊している宿屋の近くにある小さな酒場でブルームとスリイは大量の料理を目の前に、忙しくフォークと口を動かしていた。

「そりゃあ、オスカーに恨みがあつたから？」

「どんな恨み？」

「そうだなあ、例えばオスカーに何か弱みを握られていて、ばらされたくなかったら大人しく言うことを聞いてもらおうか、とか。」

「ありきたり。」

「じゃあ、スリイはありきたりじゃない考えがあるのかよ？」

ブルームの間にスリイはナポリタンパスタをフォークにくるくると巻きつけて、それを彼にびしっと突きつけた。

「小さい頃から愛を誓い合った幼馴染の恋人を寝取られた。」

「昼ドラの見すぎだよ。しかも寝取られたって……。」

ブルームのため息にスリイは特に何も返さず、フォークを口に運んだ。

「わざわざ人工生命体に自爆装置までつけて、相手を殺そうとするんだぜ。しかも邪魔する奴にも容赦なし。どんだけ、相手が憎いんだか。」

ブルームがステーキを口いっぱいほおびながら腕を組んだ。

スリイはテーブルにひじをつき、サラダのトマトをフォークで転がしながら考えた。

「……何が何でも相手を殺してしまいたいって思う気持ちってどんなときに湧くのかな？ブルームはそんな殺気を自分に感じたことってある？」

「え？」

ブルームは思わずフォークの手を止めて、スリイを見た。

どこか回答に困り、ブルームの視線は泳いだ。

「俺は……あ！」

「？どうしたの？」

ブルームが何事か言おうとしたとき、彼は何気に向けた視線の先に釘付けになった。

スリイが彼の視線を追うと、酒場の外に一人、二人に視線を向けている人物がいた。

東洋の服装をしていて、顔はフードで隠されていて見えない。

三人はほんの少しの間、お互いを見合っていたがやがてフードの男がその場を去ろうと動き始めた。

ブルームが勢いよく席を立った。

「ちよつ、待つてよ……！」

スリイが慌ててお金を机の上に置き、遅れて後に続いた。

ブルームが外に飛び出すと、その人物は少し先にたって、ブルームたちが出てくるのを待っていた。

そして、彼らの姿を確認するとまた歩き始めた。

「あれ、誰なの？知り合い？」

「ありえないけれど、自爆した人工生命体にそっくりだ。サニーたちの手がかりになるかもしれないから、俺はあとを追う！」

そういつて、ブルームは彼のあとを追った。

スリイはちよつと、迷っているようだったが一つため息をつくとき、ブルームのあとを追った。

人工生命体を追っていくと、町外れにある廃墟となつてゐる建物に着いた。

人工生命体はそこに入つて行つた。

「ちよつと、危ない感じだけど大丈夫ですかね？」

「大丈夫……だと思う。」

「その根拠は???」

「……殺氣がないんだ。」

「へ？」

「自爆する直前、そいつからは恐ろしい殺氣を感じただけで、こいつにはまったくそれを感じないんだ。」

「それつて、当てになるんですか？」

「それを信じるしかない。」

ブルームはそういつて建物の中に入つていつた。

「『それを信じるしかない』つて、なあに格好つけてるんだか。」

スリイもそうぶつぶつ言いながらも、彼の後を付いて行つた。

廃墟は工場のようなつた。

広い空間が広がつていて、人工生命体はその真ん中でブルームを待つていつた。

二人が入つてきたのを確認すると、彼はふわりとフードを取つた。

抹茶色の髪のおかつぱ頭にと黒い瞳の青年だつた。

「話したいことがある。」

彼は静かにそういつた。

「話を聞いたあと自爆するのはなしだぜ？」

「俺にはしなければならぬことがある。だから、まだ自爆するわ

けにはいかない。」

人工生命体はまっすぐにブルームに視線を向けた。

ブルームはその視線を真っ向から受け止めていた。

ブルームの少し後ろでスリイが息を吞んで、二人を見守っていた。

やがてブルームは腕を組み、小さくため息をついた。

「じゃあ、その話とやらを聞こう。少しでもやばそうだったら……。」

「

ブルームはどこからか、さっき酒場で使っていたフォークを取り出し、人工生命体に突き出した。

「お前を攻撃させてもらう。」

「先生！全然迫力ありません。」

スリイがそう突っ込むと彼は、そのフォークを人工生命体に向かって投げた。

すると、フォークは人工生命体の髪の毛をわずかにかすり、後ろの鉄の板に刺さっていた。

「い?!」

スリイが驚いていると、ブルームは得意げな顔を彼女に向けた。

「このブルーム様の得意なことはその場にあるものを何でも武器に使えることなんだぜ。」

サニーの天使様の力で、あんな堅い鉄の板にもフォークをつきたてるような、常人ではありえないこともできる。そしてここは廃工場でそういった武器になりそうなものがたくさんある。」

ニツと笑い、彼は人工生命体に振り返った。

「お前が自爆しても、ここにあるもので、被害を最小に食い止められる自身があるから、変な気は起こさないことだ。」

ブルームの言葉に人工生命体は頷いた。

「さて、理解しあえたところで話を聞こうじゃないか。」

ブルームはその辺にあった錆びたパイプ椅子に座った。

スリイはまだ警戒しているようで、ブルームの後ろにおずおずと立っている。

人工生命体は両手を胸の前で合わせ、ブルームに深々と頭を下げた。
「お願いだ。俺の兄弟を倒して、マスターを止めてくれ。」

「へ？」

ブルームとスリイは人工生命体の行動に、あっけにとられている。
人工生命体は言葉を続けた。

「俺はマスターに造られた人工生命体シリーズの2号機だ。」

1号機は先日ホテルの路地裏で自爆した奴だ。その前の晩にお前の
仲間と剣を交えたのが俺だ。

そして、現在1号機を修復した3号機が完成しようとしている。

そいつは、また同じような人殺しを繰り返すようにプログラムされ
ている。

それを止めてほしい。」

「……仲間割れなの？」

「違う。俺はマスターを心から慕っている。だから助けたいんだ。

こんなことで身の破滅を招いてほしくない。」

表情も声色に何一つ変わらないのに、その口から発せられる人工生
命体の台詞はとても人工的と思えないほど感情が溢れていた。

そのことにブルームもスリイもただ、驚いていた。

「お前、本当に人工生命体なのかよ？」

「そうだ。何故、そんなことを聞く？」

「人工生命体つてもつと無感情で何事にも動揺しないと思っていた
わ。でも君は何か必死で焦っているように感じるわ。大丈夫？？」

「……それは、俺が失敗作だからだろう。」

人工生命体は懷から短刀を抜いた。

そして、次の瞬間ブルームに向かって攻撃をしてきた。

「ひっ！」

がばつと身を縮めるスリイに対し、ブルームはそのまま動かなかっ
た。

スリイがそつとブルームのほうを見ると、人工生命体がブルームに
剣を向けて固まっている。

そんな彼をブルームはまっすぐに見つめていた。

「どうした？やれよ。」

「……できないんだ。」

人工生命体は剣をしまった。

スリイも恐る恐る立ち上がる。

「俺には殺意というものを持ってないんだ。だから前のときも直前で躊躇してお前の仲間に止められた。」

「それで失敗作なのか？」

「そうだ。マスターに言わせれば何もできないただのガラクタだ。」

「何も出来ない上に、そのマスターの行動の邪魔をするのか？」

「人殺しは悪だ。それ続けさせたくない。そんなことで身の破滅を招いてほしくない。俺はマスターに幸せになつてもらいたいだけだ。」

この人工生命体は純粹無垢だった。

正しいことは善、間違っていることは悪。

それが当たり前だと信じている。

まるで生まれたばかりの何も知らない赤子のような、清い感情を持っていた。

そんな彼のまっすぐな感情にブルームはため息をついて、立ち上がった。

「2号、お前の考えは何も間違つてはいないよ。でもな、たとえ悪の行いでもどうしてもやらなきゃならないこともあるんだ。」

「？」

人工生命体はきょとした顔でブルームを見た。

ブルームは苦笑いで返す。

「そのうちわかる。」

スリイが二人から視線をそらして、顔を伏せた。

スリイもブルームの言葉が痛いほどよくわかっていた。

人は己のため、または誰かのために過ちとわかっていても、それを選択しなければならぬことがあるのだ、と。

「まあ、いいや。本題に戻ろう。あんたのマスターは誰？どこにいて、普段は何してるの？」

「マスターの名前はミシエル。科学者だ。」

「あれ？その名前、聞いたことがあるよ。」

人工生命体から聞いた黒幕の名前を、スリイは確かに以前に聞いている。

それもすごく最近だ。

むしろ、今日である。

「あー！今日、その人に会ったよ。爆発現場にいた人で、ブルームの病院の場所を教えてもらったよ…そういわれてみればかなり怪しい人物だったかも。」

自爆した人工生命体の破片を表情一つ変えずに拾っていた科学者ミシエル。

そのときは特に怪しいところはなく、気さくな人物だと思っていた。

「ねえ、スリイ…もしかして俺ら監視されてる？」

「つけられてる？」

スリイとブルームは顔を見合わせて、人工生命体を見た。

人工生命体は短刀を抜いた。

「3号だ。」

人工生命体の視線の先に、まったく同じ姿の人工生命体がもう一体立っていた。

相手は何も武器を持っていない。

「嫌な予感…ブルーム！」

「わかってる！！」

ブルームが近くにあった鉄パイプを抱え、壁に投げつけ、外に出れるぐらいの穴を開けた。

「公共物破損？」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ！ほら走れ！！」

スリイとブルームはそこに向かって走った。

先にスリイが出ると、ブルームは動かない人工生命体を振り返った。
「2号！」

ブルームは一度だけそう叫び、穴を抜けた。
すると、大爆音が響き建物が崩れ始めた。

ブルームはすぐに建物から離れた。

「やっぱり自爆した？」

「みたいだな……。」

「これからどうするの？ 私たちどこに行っても自爆くん達が追いかけてきそうなんだけど。」

うかつに町中に戻ると、まったく関係ない一般の人まで爆発に巻き込まれることになる。

さすがに、それは避けなければならない。

「ならば、やっぱり黒幕の近くに行くしかないな。さすがに親分がいるのに自爆はしないだろ？ 何となくだけどサニーとナーレスもそこにいる気がちょっとするし。」

「そうだね。」

スリイは崩れた工場を振り返った。

「あの人工生命体を信じてみよう。」

6・エレベーター

爆破で崩れた工場に人が集まり始めたので、スリイとブルームは早々にその場を立ち去った。

町に戻ることもできず、仕方がないので二人はスリイがミシエルと初めてあった最初の爆破現場に向かったのだった。

すでに人影はなく、辺りは閑散としているようだった。

人工生命体の破片もキレイになくなっており、手がかりなるようなものは何もないように見えた。

「どうしようもなくなっちゃったね。サニーの気配もない？」

「ない…ことはない。」

ブルームは爆破現場の隅に行くと、何かを拾った。

スリイの方に振り返ったとき、手のひらに何かを乗せているようだった。スリイには何も見えなかった。

「何？」

「サニーの羽根が落ちてる。たぶん、これが彼の居場所を教えてくださいるはず。」

「あたしには何にも見えませんですけど…信じて良いの？大丈夫？」
スリイはちよつと思議そうに首をかしげた。

「天使の力つていろいろあるみたいだけど、何か一部の人しか見えないって違和感あるわ。」

「まあまあ、付いてきたらわかるよ。」

ブルームの手のひらに乗っていた羽根がふわりと浮き上がり、風に乗っているかのように移動し始めた。

「見失いそうだな、行くよ。」

「うん…はい。」

ちよつとスリイは納得いかないようだったが、他に何もしようがないので、付いていくことにした。

羽根はふわりふわりと進んでいく。

途中でふと、ブルームが立ち止まる。

「スリイさあ……。」

「何？」

「黙って付いてくるのは全然よいけど、その危ない人を見てるような訝しげな表情はやめていただけでないでしょうか？」

「あ、ごめん。自然とそんな表情になっちゃって。」

「……ひどい。」

ブルームは再び歩き出す。

スリイもごめんごめんと彼の後ろに続いたのだった。

やがて羽根はブルームがかつて来たことのある場所にやってきた。

それは人工生命体に狙われていたオスカーがオーナーの高級ホテルだった。

「ここは……。」

「ずいぶん高そうなホテルじゃない？こんなところにサニーがいてくつろいでいたらあたし怒るわよ。」

「……（死んでもナーレスと二人でここに泊まってたなんて言えない）」

羽根はホテルの前まで来てふわりと上昇し、ホテルの窓の中へ消えていった。

「やっぱり中に入らないとわからないみたいね。」

「入って良いのかな？」

「たぶん、大丈夫だと思うけど……。」

二人は恐る恐るホテルの中に入る。

ごく普通の少年とメイドさんという異色の組み合わせは少なからず違和感があったが、それでも周りのお客は二人には無関心だった。

二人はとりあえずフロントで作り物の笑顔を張り付かせている女性にナーレスかサニーらしき人物が宿泊していないかどうかを確認した。

「その方は恐らくオーナーのお客様だと思われます。あちらのエレベーターの最上階にどうぞ。」

女性はそれだけ告げると、それ以上話しかけるな、と言っているような笑顔を向けて一礼した。

「罨のにおいがするな。」

「でも行くしかないでしょ？ ナーレスがいれば大丈夫だと思うわ。」

「いなかったら？」

「助けを、待つー！」

スリイの潔い発言にブルームはため息をついたが、仕方ない、と一緒にエレベーターに向かった。

「俺も行くー。」

「ー！お前は？！」

ブルームの横にあの人工生命体が立っていた。

フードを深めにかぶり、その表情は見えなかった。

「お前無事だったんだな？」

「ああ。」

エレベーターの扉が開いた。

最初にスリイがエレベーターの中に入った。

続いてブルームが入ろうとしたとき、ホテルのロビーに走ってくる人影が見え、ブルームはそちらを見て思わず足を止めた。

その人物は自分達の横にいた人工生命体と同じ姿をした人物だった。

「それは俺じゃないー！乗ってはいけないー！！」

人工生命体が叫ぶと同時にエレベーターのドアは閉まった。

中にはスリイと、もう一体の人工生命体に乗っている。

「しまったー！」

ブルームは慌ててエレベーターのボタンを押したが、無情にもエレベーターは動き出した。

「くそっ！」

「まだ間に合うー！」

「え？」

人工生命体はすぐ横のエレベーターにブルームを乗せた。すぐに扉をしめ、ボタンのいくつかを連続して押した。

彼をよくよく見ると確かに服はボロボロで髪もぼさぼさ、顔も黒い
すがたがたっさん付いていて、このホテルにはまったく合っていないな
った。

彼は間違いなくあの廃工場と一緒にいた人工生命体だった。

「最上階について扉が開く瞬間が一番危ない。用心しろ。」

「わかっている。でもあのスリイと一緒にいたのは？」

「俺の兄弟だ。彼女が無事だったらいいのだが。」

「大丈夫だと思うよ。あの子、逃げの天才だからね。」

「そうだけど、さすがに密室はちと無理があるっちゅうの!!」

その頃もう一方のエレベーターでスリイは必死に人工生命体から逃
げていたが、やはりせまいエレベーターの中では限界があり、すで
に人工生命体から攻撃を受け、気を失っていたのだった。

ブルームを乗せたエレベーターが最上階に到着した。

エレベーターの扉が開くと同時に、人工生命体が飛び出した。

その様子を見て、ブルームも警戒しながらエレベーターを降りた。

「ようこそ、最上階へ。」

そんな二人をあざ笑うかのように、ミシエルは広い部屋の一家にあ
る高そうなソファに座ってワイングラスを回していた。

「お前が黒幕のミシエルか？」

「どうも初めまして。まあ、残念ながら君のような品のない少年と
お友達にはなりたくないな。彼女ひとりで十分だよ。」

「！」

ミシエルの影に隠れるようにスリイがソファに寝かされていた。
いつものメイド服は脱がされ、薄い下着姿だった。

「この変態！！スリイから離れろ！！お前はエロジジイかよ！」

「君のような幼稚なお子様にはまだ早いかな。楽しみを邪魔しないでくれたまえ。」

ブルームの前に人工生命体が立ちはだかった。

「ここは俺が相手する。」

「2号、でもボロボロじゃないか。」

「彼女を助ける。」

2体の人工生命体は短刀を抜き、同じタイミングで攻撃を始めた。その動きは精巧で一分の狂いなく、まったく同じような動きをしている。

しかし、ほんの少しだけ2号の動きがにぶいことがブルームから見てもわかった。

ブルームは急いでふところからフォークを取り出したが、動くことが出来なかった。

スリイの白い首にナイフが当てられている。

「そのフォークを少しでもこっちに投げようとしたら彼女の首に刺しちゃうよ。」

「……変態にもほどがあるぜ。」

「ふふっ、じゃあ続きを楽しませてもらうとしようか。」

「ひいっ！」

ミシエルがスリイの最後の下着を取ろうとし、ブルームは思わず目を多いそうになったがふと大きな黒い影が床に広がっていることに気づき、窓を見た。

窓には大きな黒い翼が見え、そして小さな白い翼が窓を突き破り、ミシエルの脳天目指して飛んできた。

「うさぎキークー！！！！」

「ぶわはあっ！！！！」

ステアのキックがミシエルの後頭部にヒットし、白目をむいてミシエルは倒れた。

その間にナーレスがスリイと抱え、ブルームたちの方に降りてきた。

「お待たせしたね。ちょっとサニーを探すのに苦労したんだ。」

「ごめんよ、爆発でパニックになっていたんだ。」

と、口の開いたのはステアだった。

見るとステアの背中にちょこんとかわいい白い羽根がついている。

「サニー？」

「うん」

「さて、お二人感動の再会は後にして、とっとこの状況を片付けませんか。」

ナールスの言葉にブルームは周りを見渡す。

未だぎりぎりまで戦っている人工生命体と、頭を抑えて立ち上がるミシェル。

そう、まだ終わったわけではない。

「全員集合したところで、お片づけと行きますか！！」

7・メイド服

「お前達は何者だ？どこから現れた？？」

ミシエルは窓から突如として現れたナーレスとステア（中身はサニ―）に動揺してあたふたしていた。

同じ動き同士で戦っていた人工生命体たちも動きを止めた。

「乙女のピンチにはどこからでも駆けつけるイケメンのお兄さん、それがこの俺ナーレスだぜ！」

「聞いてて恥ずかしい台詞ですね。」

スリイをお姫様抱っこし、王子様を気取っているナーレスにステアは苦笑いした。

「とりあえず、彼女は返していただきましたので、これにて失礼します。」

ステアは丁寧に深々とお辞儀をすると、タイミングよくエレベーターのドアが開いた。

ブルームをはじめ、ナーレス、そしてステアがすばやく乗り込んだ。

最後に一瞬の隙をつき、2号が続き、ドアは閉じた。

「それでは皆様、お邪魔しました。」

もちろん慌ててもう1体の人口生命体も続いたが、間に合うことはなくミシエルとともに、ドアの向こうに消えていったのだった。

「にしても、ナーレス、ずいぶん素晴らしいタイミングじゃねえか

……見計らってたろ？」

「当たり前じゃないか！！乙女のピンチに絶妙のタイミングで乗り込まないと、格好がつかないじゃないか！」

「つけなくていいっすー！！はあ。」

ブルームはため息をつくとき、しゃがみこみ、横にちょこんと立っているステアの頭を手をおいた。

「俺はちよつと疲れたよ、あと頼むぜ、サニ―。」

「うん、ご苦労様。」

一瞬、ブルームの身体から力が抜けたと思うと、ステアの背中にあった羽根が消え、サニーはもとの身体に戻っていた。

「あゝ、何か久しぶりな気がするなあ。ウサギの身体もなかなかだったよ。」

「何かいやらしく聞こえるぞ。」

「ナーレスだけでしょ。」

エレベーターが地上に着く前にナーレスはスリイを大きな布で覆った。

そういえば、彼女のメイド服を取り戻すのを忘れてしまったようだ。

「とりあえず、宿に戻るか。スリイの意識も戻らないみたいだし、いろんなことがあったから一度ゆっくり休もう。めんどくさいからワープるよ。」

「ワープる？」

「そう、1、2の3！！」

ナーレスがそう言うのと、エレベーターの床に六角形の魔法陣が現れて全員を包み込んだ。

驚いてサニーがまばたきすると、次の瞬間には宿の部屋に戻っていた。

「便利〜なんで、早く使わないの？…あれ？」

ナーレスの返事がないと思ったら、彼は床にひざを着いて息をついているようだ。

やはり相当な魔力を使うらしい。

「今日の大仕事終了。それじゃあ、お休み。」

ナーレスが珍しくふらふらと部屋に戻っていった。

サニーは変わりにスリイを部屋に運び、ベッドに寝かした。

ふと、部屋に戻ろうとすると、人工生命体の2号が一緒にいることを思い出した。

「君も男子だから、僕たちと同じ部屋だね。」

「すまない、勢いで付いてきてしまったがよかったのだろうか？」

「いいよ、君は僕たちの味方みたいだしね。一緒に休もう。」

サニーは2号をナーレスのいる部屋に連れて帰った。

ナーレスは相当疲れたらしく、すでにベッドで横になり静かな寝息を立てていた。

ボロボロの2号を見て、サニーは彼の髪をとき、ボディを布でふきとりあえず服を宿の寝巻きに着替えさせた。

「明日君の服も見に行こうね。じゃあ、今日は寝よう、おやすみ。」

「…ありがとう。」

「いいって。」

サニーは床の毛布に包まった。

2号は部屋の端に座り、静かに目を閉じたのだった。

翌朝。

「おつはー、ナーレスママです！みんな元気？」

「意味わかんないよ。」

早朝から無駄にテンションの高いナーレスに僕は起こされた。

見ると、2号もすでに起きているようで、静かにそこにたたずんでいる。

「おはようございます。」

部屋にステアが入ってくる。

「よし、全員そろったな。今から、今日の予定を発表する！」

「朝から何？」

ナーレスは朝から楽しそうだ。

「今日は我らがヒロイン、スリィちゃんの新しいメイド服を買いに行くー！！」

それぞれ、スリィちゃんに着せたいメイド服を選び、もって来るように。

「まじで?!」

その一言で僕の眠気も一気に覚めた。

そういえば、昨日スリイを下着姿のまま救出した僕たちは、彼女のメイド服を奪還することを忘れていたのだ。

「スリイちゃんの起きる前に、野郎どもセレクションのメイド服を用意し、彼女の選んでもらおうではないか！」

「さんせーい！！」

スリイの今までメイド服は正統派だが、はつきり言って少し地味である。

深緑のワンピースに白いエプロン、白いメイドハットにワンポイントのコウモリ、そして黒編み上げブーツに赤い縁のメガネ。

もう少し萌え要素がつてもよいのではないかと僕は常々思っていた。

「よし、では膳は急げ。解散！！」

「おー！！」

と、意気揚々と僕らは出かけたのだった。（何だこの展開。）

30分後、僕らはスリイの部屋の集合していた。

目覚めたスリイが「何事？」とびっくりしている。

「じゃあ、早速選んでいただきましょうか！スリイちゃん、どのメイド服がいい？」

「はあ？」

スリイの目の前に5着のメイド服が並べられていた。

ナールス、僕、ブルーム、ステア、2号、それぞれが選んだメイド服だ。

ナールスが選んだのはピンク色のチェックのワンピースに白いフリリエプロンのメイド服。

ホルターネックになっていて、肩が大きく開いたデザインになっている。

パフスリーブの半そでで、腕には白い袖口をかたどった飾りが付いている。

ピンク色のリボンの付いたハイヒールであわすと、まるでアイドルのような可愛さだ。

露出が多いから、可愛さの中にどこかセクシーな感じがする。

「ヒロインはやっぱりこれくらいじゃないとね。メガネもコンタクトにしようね」

次に僕が選んだのは黒いワンピースのメイド服。

ミニスカートで背中に某セーラー。ーンのような大きな白いリボンがついている。

白いヘッドドレスは耳の後ろから白いリボンが出ているのが可愛い。そしてポイントは編みタイツのような柄のニーソックス！！

黒いパンプスで合わせて、足元は大人しめに決めてみました。

「ニーソックスがいいんです！！」

ブルームが選んだのはマニアックな和服メイド。

桜色の着物に白いエプロンがなんとも可愛い。

頭には赤いリボンをつけて、足元はやっぱり足袋とぞうり。

「これからは和風でしょ？」

次にステアが選んだのは……

「もうええっちゅうねん！！！！」

「えゝ、今から僕を紹介しようと思ったのに。」

ステアがなみだ目で訴えたが、スリイはこれをぴしゃりとシャットダウン。

「あのさあゝみんなメイド服に夢中だけど、大事なこと忘れてない？」

「メイド服より大事なことなんてない！！」

「あほ。」

言い切ったナーレスにスリイは近くにあった鍋を投げた。

「そもそも何で、オスカーのホテルの最上階にミシエルがいたのよ、おかしいじゃない？」

オスカーを殺そうとしていたのに！！変だわ。」

「！！！！」

確かにその通りである。

最初、僕たちがオスカーにあつたとき、彼はそこにいる2号に殺されそうだったのだ。

「その通りだよ、スリイちゃん!!……で、結局誰の選んだのに……
ぐはっ!!!」

しつこいナーレスにスリイの鉄拳がくだったのは言うまでもない。
。

7・メイド服（後書き）

スリィちゃんのメイド服案を考えたかったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2123b/>

Sunny Day Bloom 2

2010年11月16日03時36分発行